

関係各位

『新潟産業大学経済学部紀要』第49号（2017年7月）掲載論文の抹消について

平素より『新潟産業大学経済学部紀要』をご高覧いただき、誠にありがとうございます。掲題の論文抹消につきまして、これまでの経緯および本学の対応と今後の方針をご説明申し上げます。

本学『紀要』第49号（以下『紀要』という）に掲載された「日本・韓国・中国の乾漆像」の筆者である本学経済学部片岡直樹教授（以下筆者という）は当初より同論文の韓国語訳を後日韓国・美術史研究会の学会誌『美術史研究』第32号（以下『美術史研究』という）に掲載する予定で準備を進めており、その旨を『紀要』における同論文の末尾に明記しましたが、その後、以下のような不測の事態が重なりました。

- ①本学『紀要』の発行年月が予定より繰り下がり2017年7月となったことで、同年6月発行の『美術史研究』との前後関係が逆になってしまった（論文の初出が『紀要』ではなく『美術史研究』となってしまった）。
- ②『美術史研究』には『紀要』掲載論文の韓国語訳だけでなく、筆者が想定していなかった日本語文も掲載された。
- ③論文のタイトルについて、当初筆者は「日本の乾漆像—中国・韓国仏との関連において—」と「日本・韓国・中国の乾漆像」の2つを後補として執筆を進め、論文完成後に内容をみていずれかに統一するつもりでいたが、筆者のミスによって『美術史研究』には前者のタイトルで、『紀要』には後者のタイトルで論文が掲載されてしまった。

このうち①は予期できぬ事態である一方で②と③は先方との意思疎通を含め筆者の対応が不適切だったことによるもので、きわめて遺憾とするところですが、筆者にはもとより二重投稿の意思がなかったことは、筆者が『紀要』論文の末尾に「本論文の韓国語訳が韓国・美術史研究会の学会誌『美術史研究』第32号に掲載予定である。」と明記していること、また不測の事態に気づいた筆者自らが直ちに『紀要』掲載論文の抹消を申し出ていること（後述）からも明らかです。

こうした事態への本学の対応ですが、2018年12月に筆者本人より『紀要』掲載論文の抹消についての申し出があった後、直ちに学内関係機関で協議した上で、以下のような措置を取りました。

- ①本学リポジトリから同論文を削除した。
- ②同論文の抹消と上記の経緯を記した下記紙片を『新潟産業大学経済学部紀要』第53号（2019年6月発行）に挟み込み、関係各位に送付することで周知をはかった。

本誌第49号掲載の拙稿「日本・韓国・中国の乾漆像」の抹消について

片岡 直樹

上記論文はその韓国語訳が韓国の学会誌に掲載予定であったため、論文の末尾に「なお、本論文の韓国語訳が韓国・美術史学会の学会誌『美術史研究』第32号に掲載予定である。」と付記しておいた。しかるに私の手許に届いた同誌には韓国語訳とともに日本語文も掲載されており、表題も「日本の乾漆像：中国・韓国仏との関連において」と本誌のそれとは異なるも

のとなっていた。このことはひとえに先方の学会との十分な意思疎通を怠った私の責任であり、加えて同学会誌の発行日が2017年6月15日、本誌第49号の発行日が同年7月31日となってしまったため、結果的に前後の関係が逆になるという不測の事態も重なった。もとより私には二重投稿の意思などなく、後の刊行となった本誌に掲載の上記論文は業績から抹消するとともに、本誌関係者にお詫びを申し上げる。今後各位が拙稿の内容に言及されるようなことがあれば「日本の乾漆像：中国・韓国仏との関連において」（『美術史研究』第32号、韓国・美術史研究会）を対象としていただきたくお願いする次第である。

しかしながら、近年になって、こうした紙片を見ていないと思われる学外者から本件を二重投稿ではないかとするご指摘を受けたことで、『新潟産業大学経済学部紀要』第62号（2023年2月発行）の巻末に、再度以下の文を掲載し、あらためて周知をはかりました。

【再掲】過去掲載論文の抹消について

下記論文については当時筆者本人からの申し出によりこれを抹消し、事情を説明した紙片を以後発行の本誌に挟み込むことで周知をはかった。しかるに一部図書館ではこの紙片が漏れているようであり、改めて当時の紙片の説明文をそのまま掲載し、周知をはかることとしたい。

本誌第49号掲載の拙稿「日本・韓国・中国の乾漆像」の抹消について

片岡 直樹

上記論文はその韓国語訳が韓国の学会誌に掲載予定であったため、論文の末尾に「なお、本論文の韓国語訳が韓国・美術史学会の学会誌『美術史研究』第32号に掲載予定である。」と付記しておいた。しかるに私の手許に届いた同誌には韓国語訳とともに日本語文も掲載されており、表題も「日本の乾漆像：中国・韓国仏との関連において」と本誌のそれとは異なるものとなっていた。このことはひとえに先方の学会との十分な意思疎通を怠った私の責任であり、加えて同学会誌の発行日が2017年6月15日、本誌第49号の発行日が同年7月31日となってしまったため、結果的に前後の関係が逆になるという不測の事態も重なった。もとより私には二重投稿の意思などなく、後の刊行となった本誌に掲載の上記論文は業績から抹消するとともに、本誌関係者にお詫びを申し上げる。今後各位が拙稿の内容に言及されるようなことがあれば「日本の乾漆像：中国・韓国仏との関連において」（『美術史研究』第32号、韓国・美術史研究会）を対象としていただきたくお願いする次第である。

本学公式サイトへの説明が未掲載であったことが以上のような混乱を来した一因でもあることから、今回このようなかたちでご説明をさせていただくこととなりました。本件はいわゆる研究不正とは言えないまでも、こうした疑義を生じたことは誠に遺憾とするところであり、各位には改めて深くお詫びを申し上げます。今後とも全学を挙げて研究倫理教育の推進に取り組んでまいる所存ですので、今後も変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2023年5月22日

新潟産業大学長 梅比良 眞史